

京都市帝國大學法學科大學

經濟論叢

第一卷 第一號

論說

●貧富問題(一)

法學博士

田島錦治

●でがゐつごひゆゝむの經濟學說(二)

法學博士

福田德三

●地代ノ性質ニ就テ

法學博士

戸田海市

●地方財政ノ調整

法學博士

神戸正雄

雜錄

●減債基金ト鐵道資金

法學博士

小川郷太郎

●獨逸ノ自治制ニ就テ

教授

財部靜治

●戰爭ト社會問題

講師

米田庄太郎

●津村博士ノ國民經濟學原論ニ就テ

法學博士

河上肇

雜報

●租稅ノ新傾向

法學博士

神戸正雄

●佛國ノ外國放資

法學博士

小川郷太郎

●佛國植民地ノ現勢

助教授

山本美越乃

●著名ノ婦人ニ關スル統計的研究

法學博士

河上肇

●麥ノ收穫ト米價

講師

高田保馬

●最近人口靜態統計

法學士

大山壽

●日本經濟叢書第十二卷ヲ讀ム

法學士

本庄榮治郎

●和田垣教授在職二十五年祝賀

法學博士

神戸正雄

●Robert Meyer 逝ク

法學博士

小川郷太郎

●びにるるろわぼりりゆー氏ノ陳亡

法學博士

織田萬

雜
錄

減債基金ト鐵道資金

法學博士 小川 郷 太 郎

一

我國ノ公債ハ、日露戰爭ノ前ニ於テハ僅ニ五億餘圓ニ過キサリシガ、日露戰爭後ニ至テ、俄然貳拾餘億圓トナレリ、當時ノ政治家皆以爲ラク、我財政ノ累ヲ爲スモノ必スヤ此公債ナラント、乃チ倉皇トシテ國債整理基金特別會計法（明治二十九年二月二日法律第六號）ヲ制定シ、一定ノ基金ヲ置キテ公債ノ償還發行ニ關スル費途ニ之ヲ使用シ（一條其基金ニハ毎年度一般會計ヨリ繰入レ其繰入資金中日露戰爭ノ戰時公債ニ關スル分ハ年額壹億壹千萬圓ヲ下ルコトヲ得サルモノトセリ（二條）蓋シ其初ニ當リテハ壹億壹千萬圓ノ中ニハ八拾餘萬圓ノ利子ヲ含ミ其償還額ハ參千餘萬圓ニ過キササルモ、年月ヲ經テ償還ノ度ヲ重キルニ從ヒ、利拂ノ割合少クナリ償還ノ割合多クナリ行クカ故ニ加速度ノ勢ヲ以テ公債ヲ償還ヲナスコトヲ得ベク、以テ減債ノ目的ヲ達シ得ベシトセシナリ、是カ故ニ、學者之ヲ減債基金ト名ク。

余ハ其當時減債基金ヲ以テ却テ我財政ニ累ヲ爲スモノナリトシ、極力之ニ反對セリキ、(註)一其理由トスル所ハ左ノ如シ。

蓋シ國家生活ニハ波瀾アリ財政ハ常ニ其波瀾ニ應スルノ準備ナカルベカラズ換言スレハ財政ハ時ニ隨テ自由ニ伸縮シ得サルベカラズ、財政ニシテ時ニ隨テ自由ニ伸縮セントセハ其收入ヲ一定ノ用途ニ固定セシムベカラズ然ルニ減債基金ハ一定ノ收入ヲ一定ノ用途ニ固定セシメ他ノ流用ヲ許サス、是カ故ニ財政ハ時ニ應シ自由ニ伸縮スルヲ得ス財政難ハ從テ生セサルヲ得ズ是レ余ノ減債基金ヲ非ナリトスル所以ノ一ナリ。

又國家ハ一朝變事ニ遇テハ之ニ應スルノ處置ヲ爲ササルベカラズ、收入足ラサレハ、公債ヲ起スモ亦辭スベカラズ、然ルニ減債基金ノ制度ハ此ノ如キ場合ニモ公債ノ償還ヲ繼續シ少シモ除外例ヲ設クルコトナシ、是カ故ニ左手ニ償還シ、右手ニ起債スルノ結果トナリ、國庫ハ之ガ爲ニ起債ト償還トニ要スル經費ヲ損ジ發行價格ト償還價格トノ差ニテ損シ、低利ノ公債ヲ償還シ、高利ノ公債ヲ起スニ於テ損スベシ、蓋シ國家カ財政難ニ遇テ起債スルトキハ動モスレハ發行價格ハ低カラントシ利子ハ高カラントスレハナリ、故ニ減債基金制度ハ公債ヲ安ク賣リテ高ク買フノ結果ニ陥ルモノト謂ハサルベカラズ、是レ余ノ減債基金ヲ非ナリトスル所以ノ二ナリ

減債基金ハ斯ノ如ク財政ノ伸縮ヲ妨ケ、又國庫ノ損失ヲ招クカ故ニ、到底當初ノ計畫ヲ變セズシテ長キニ亘ルヲ得ズ後年ノ財政家ハ必ズシモ、前年ノ財政家ニアラス、前ノ財政家ノ爲ス所ハ必スシモ後ノ財政家ヲ拘束セズ、故ニ後ノ財政家ハ財政難ヲ切り抜ケンカ爲ニ減債基金ヲ他ニ流用スルニ躊躇セサルベシ、是ニ至テ減債基金ノ精神ハ之ヲ貫カント欲スルモ得ベカラサルナリ、

既ニ減債基金ノ精神カ長キニ亘リテ貫キ得サルモノトセハ初ヨリ之ヲ設ケサルニ若カズ是レ余ノ減債基金ヲ非ナリトスル所以ノ三ナリ。

減債基金ヲ創設シ、又之ヲ維持セントスルモノハ此制度カ公債ノ償還ノ擔保シ、以テ國家ノ信用ヲ高ムルモノナルコトヲ論スト雖モ、既ニ財政ノ伸縮ヲ妨ケ、却テ之カ爲ニ國庫ノ損失ヲ招キ、以テ財政難ノ窮境ニ陥ラシムルモノトセハ國家ノ信用ヲ高ムルニアラズシテ低メルコトトナラサルヲ得ズ、加之進歩セル國家ニ於テハ財政ヲ變理スルニ道ヲ以テスルカ故ニ、減債基金ナシト雖モ、信用低カラズ、蓋シ公債所有者ハ減債基金ヲ見ルリモ、財政一般ノ狀態ヲ見ルモノナレハナリ、果シテ然ラズ、減債基金ノ制度ハ不必要ナリト謂ハサルベカラス是レ余ノ減債基金ヲ非ナリトスル所以ノ四ナリ。

余ハ以上ノ理由ヲ以テ減債基金ノ創設ニ反知シタリシガ、時人、素リ余カ説ニ耳ヲ傾ケザリキ、爾來春風秋雨將二十年ナラントス、首ヲ回フシテ過キニシテ年間ニ於ケル財政ノ變遷ヲ考ヘ、首ヲ擧ゲテ、現時ノ財政尙尪フ觀ルニ、幸々不幸々、余ノ豫言ハ適中セルカ如シ、見ニ、財政ハ之カ爲ニ自由ニ伸縮スルコトヲ得サリシニアラスヤ、國家ハ一方ニ起債シ他方ニ償還シ大ニ損失セシニアラスヤ、事實ハ何ヨリモ雄辯ナリ、此雄辯ニ對シテハ何人モ聾タル能ハサルナリ、財政家豈獨リ長ヘニ聾タルヲ得ンヤ。

大隈内閣組織セラルルニ及テ、減債基金ニ手ヲ付ケ、其償還割合ヲ減シ之ヨリ得タル餘裕金ヲ流用シテ鐵道資金ニ充ツルノ政策ヲ立テ、之ヲ以テ昨年冬ノ三十五議會ニ臨ミ、又今次ノ臨時議會即チ三十六議會ニ臨ミ終ニ之ヲ貫徹スルニ至レリ、是レ實ニ減債基金流用ノ初ナリ、然レトモ

減債基金カ流用セラレ始マラバ減債基金ハ精神ニ於テ死スルナリ、思フニ今後政治家ハ寄テタカツテ之ヲ黷殺シニセスンバ已マサルベシ、是レ亦自然ノ運命ナレハ、少シモ惜ムニ足ラズ、否我國財政ノ前途ヨリ見テ寧ロ之ヲ歡ハサルベカラズ。

減債基金制度ハ歐洲ノ先進國ガ曩ニ之ヲ試ミテ失敗シ、我國、後ニ之ニ倣テ亦失敗セリ、若シ前車ノ覆ルヲ見テ後車ノ戒トナスベクンバ減債基金ハ始メヨリ我國ニ輸入セラルベキモノニアラサリシナリ、之ヲ輸入シテ、豫定ノ失敗ヲ爲シタルハ偏ニ我國財政ノ爲ニ之ヲ悲マサルヲ得ズ、然レトモ過去ハ追フベカラズ、宜シク現在將來ヲ戒ムベシ、大隈内閣ハ今ヤ過去ノ財政策ノ非ヲ悟リ大斧鉞ヲ振テ、減債基金破壊ニ着手シタリ、余輩ハ余輩ノ説ノ實行セラレントスルヲ見テ、衷心之ヲ喜ヒ、双手ヲ舉テ之ニ贊セサルヲ得サルナリ。(註二)

之ヲ要スルニ、減債基金制度ハ財政ノ伸縮ヲ妨ケ、甚シキハ左手ニ償還シ、以テ右手ニ起債シ以テ國庫ヲ損スルモノナルガ故ニ、財政政策トシテハ速ニ之ヲ廢棄セサルヘカラズ、若シ之ヲ廢棄シ得ストセン乎、財政難ヲ救フカ爲メニハ基金流用ノ途ヲ開キ表面ニ之ヲ活カシ裏面ニ之ヲ殺スノ策ニ出ヅルノ要アルベシ。

(註一) 京都法學會雜誌第一卷第一號一〇五九頁同第二號二七六三頁

(註二) 太陽二十卷九號(七月號)七九頁以下、拙稿「大隈内閣ノ財政策ヲ評ス」參照。

二

減債基金ハ早晚之ヲ廢セサルベカラサルモノナルコトハ前述ノ如シ、然ルニ大隈内閣ハ正面ヨ

リシテ一刀兩斷之ヲ廢スルコトヲ爲サス、償還ノ割合ヲ減シテ以テ間接ニ此制度ヲ打破セントスルノ政策ヲ採レリ。

減債基金創設ノ際ハ戰時公債ニ關シテハ少クトモ壹億千萬圓ヲ繰入レ以テ元利ノ支拂ニ供シタレトモ、實際償還ニ使用セラルベキハ參千萬圓ニ過キサリシガ明治四十二年ノ桂内閣以來、五千萬圓ヲ償還スルト云フ方針ヲ立テリ、然ルニ償還ノ度ヲ重ヌルニ從ヒ利子額減スルカ故ニ次第ニ五千萬圓以上ヲ償還シ得ルニ至ルモノナルガ、大隈内閣ハ年々償還ノ最下限ヲ參千萬圓ニ下サントシ其國債整理基金特別會計法第二條二項ヲ改正シテ。

前項繰入額ノ中、國債ノ元金償還ニ充ツベキ金額ハ他ノ特別會計ヨリ繰入ルルモノヲ併セテ前年度首メニ於ケル國債總額ノ萬分ノ百十六以上トシ參千萬圓ヲ下ルコトヲ得サルモノトス前項ノ規定ノ適用ニ付テハ大藏省證券及借入金ハ之ヲ國債ト看做サズ。

トセリ是ニ於テ參千萬圓償還ノ制限ハ獨リ戰時公債ニ限ラス總テノ確定公債ニ亘リテ適用セラルルコトトナリシガ、兎モ角モ政府ハ之ニ由テ貳千萬圓ヲ割キ得テ鐵道資金ニ流用スルコトヲ得ルニ至レリ苟クモ減債基金ノ性質ヲ知り歴史ヲ知ルモノハ、此政策ニ對シテ異論ヲ擯ムベカラズ、夫ノ國民黨ノ如キ、大隈内閣ノ諸政策ニ反對シテ已マサルモノニ在リテモ、減債基金中ヨリ貳千萬圓ヲ割クト云フ政策ハ之ヲ贊成シテ更ニ惜ム所ナシ、柏原文太郎氏ノ議會ニ於ケル演說ハ之ヲ證シテ餘リアリ、(註一)、獨リ政友會ニ至リテハ今猶、減債基金ニ戀々シ、之ヲ割クコトヲ肯ンセズ是レ素ヨリ反對センカ爲ニ反對セントスルモノナルベシト雖トモ、其論旨ノ聽クベキナキハ偶々以テ其減債基金ヲ維持スルニ足ラサルノ反證トナスコトヲ得ベケン、政友會ノ領袖床次竹二郎氏

ハ六月一日ノ衆議院ニテ演說シテ曰ク。

「現内閣ノ當局者ノ説明スルトコロニ依レハ、一方デ金ヲ借リテ一方デ金ヲ還スハ面倒デアアル。又此處デ懷勸定ヲシテ濟マサウト云フノデアリマス、洵ニ不都合ナカリ方デアアルコトハ申スマデモナイガ、斯様ナコトヲ以テ此重要ナル政策ノ變更ヲ企テヤウトスルコトハ、國家ノ信用ヲ繫ク所以デハナイト考ヘマス、重要ナル政策ヲ變更スルニ付テ、明瞭ニシテ必要ナル理由ガアルトハ考ヘラレナイト云フコトハ茲ニ斷言シテ置キマス」(註二)

ト、然レトモ一方ニ金ヲ借リテ一方ニ金ヲ還スヲ避ケントスルハ懷勸定ヲシテ濟マサントスルカ爲メニアラズ、國庫カ之カ爲ニ至大ノ損失ヲ被ルヲ避ケントスル大問題ナリ、國庫ガ損失ヲ被ルハ「國家ノ信用ヲ繫ク所以ニアラズ」此ノ如キ愚ナル政策ハ斷然、之ニ「變更ヲ企テ」サルベカラス、是レ實ニ「明瞭ニシテ必要ナル理由」ナリ、床次氏ハ我減債基金ガ過去ニ於テ、如何ニ我財政上ニ累ヲ爲セシカラ知ラサルカ如ク爾リ、偏ニ氏ノ爲ニ之ヲ惜ム。

此ノ如ク減債基金ノ爲ニ國庫ガ損失ヲ爲スコトヲ認メサルノ論ハ最モ亂暴ナル論ニシテ、共ニ減債基金ノコトヲ談スルニ足ラス、然ルニ減債基金改正ニ反對スモノハ更ニ外國ノ信用ヲ繫クコトヲ得サルノ理由ヲ以テスルモノアリ、貴族院ニ於ケル高橋是清男ノ論ノ如キ即チ是ナリ(註三)蓋シ公債償還額ヲ五千萬圓ヨリ參千萬圓ニ減スルトキハ、外國公債ノ償還ヲ減スルコトトナリテ、國家ノ信用ヲ繫キ得ズトスルナリ、然レトモ、國家ガ從來ノ償還額ヲ維持シ而モ他方ニ不利ノ條件ヲ以テ公債ヲ起サバ、財政ヲ紊亂スルコトトナルベク、却テ國家ノ信用ヲ繫クコトヲ得サルナリ、加之公債償還額カ參千萬圓ニナリタリトテ必スシモ外債ノ償還ヲ減スルコトトナラズ何トナレバ明治四十四年來ノ例ニ倣ヒ千萬圓ノ外債償還ヲナスコト難カラサレバナリ、然レトモ此クテハ尙論者ヲ満足セシムルコト能ハズ、論者ヲ満足セシメントセバ此際多額ノ外債ヲ急ニ償還スル

コトトセザル可ラズ高橋男ノ演説ノ如キ即チ是ナリ(註四)然レドモ、コハソレ自身、非常ニ、大ナル疑問ト云ハサルベカラズ、蓋シ、歐洲ノ戰爭ハ何時終熄スベキカ未タ容易ニ知ルコトヲ得サルモノアリ、故ニ、一旦公債ヲ償還スルトシテモ、近キ將來ニ於テ再ヒ起債シ得ルト限ルベカラズ、果シテ然ラハ近キ將來ニ於ケル我正貨問題ヲモ顧慮シテ基金問題ヲ解決セサルベカラズ、既ニ若槻藏相モ論セルカ如ク、(註五)從來ノ法ニ據レハ本年ノ償還額ハ五千百萬圓トナリ來年ハ六千貳百餘萬圓トナリ數年ナラスシテ六千萬圓トナルベク、之ヲ内國ニ於ケル戰時公債ノ償還ニ充テハ、數年ノ後ニハ之ヲ償還シ盡スベク次ニハ外國ニ於ケル我戰時公債ノ償還ニ向フコトトナルガ、六千萬圓ノ償還ニ、六千萬圓ノ利子ヲ加ヘハ壹億貳千餘萬圓ノ正貨ヲ流出スルコトトナラサルベカラズ、然ルニ其時ニ及ヒ此ノ如キ多額ノ正貨ノ流出ハ、我國民經濟ヲ危クスルモノトナルヤモ知ルベカラズ、故ニ其時ノ經濟界ノ狀況如何ニヨリテ外債内債ノ償還額ニ伸縮ヲ加ヘサルベカラズ、若シ之ヲ思ハバ戰時公債費ニ壹億千萬圓ヲ充ツル政策ガ膠柱ノ謗ヲ免ルル能ハサルヲ知ルベシ、論者或ハ又償還額ヲ減スル時ハ大正十五年迄ニ滿期トナルベキ英貨四分半利付ノ公債其他ノ外債六億七千萬圓ノ償還ニ苦マントテ反對スルモノアレトモ、(註六)減債基金法ヲ改正セズ從來ノ儘ノ償還方法ヲ探ルモ、大正十五年迄ニ償還ヲ了シ得ベキニアラズ、コハ何レニスルモ、將來十年間ニ於テ、經濟市場ノ狀況ヲ見テ借換ヲ爲ササルベカラサルモノナリトス、故ニ四分半利付英貨公債并ニ其他ノ外債ノ問題ハ借換ノ問題ニシテ、減債基金改正ヲ非トスルノ理由トスルコトヲ得サルナリ、

論者又或ハ減債基金法ノ改正ハ公債ノ償還ヲ不當ニ延ハスモノナリトシテ其非ヲ鳴ラスルモノ

アリ澤柳博士ノ八十六ヶ年說ノ如キ是ナリ(註、七)此論ハ只過去ノ公債ノミヲ眼中ニシテ將來起サルベキ公債ヲ眼中ニセズ、若シ從來ノ通り一方ニ公債ヲ償還シ他方ニ公債ヲ起シテ止マサラン乎八十六年ヲ經ルトモ公債ノ償還ハ之ヲ了スルコト能ハサルベシ、又此論ハ公債ハ急速ニ之ヲ償還シ了ラサルベカラザルモノノナルコトヲ前提トス、然ルニ最近文明國ノ公債ハ私債ト異リ急速ニ償還シ了ルコトヲ要セザルモノトナレリ、是レ永遠公債ナルモノ、發達セル所以ナリ、英國ニ於テ奈翁戰爭當時ノ公債尙現存スルノモノアルヲ見バ蓋シ思半ニ過キサラン。

之ヲ要スルニ減債基金改正法ニ反對スル議論ハ種々アレトモ、皆公債ノ性質ヲ究メズ、減債基金ノ作用歴史ニ通セサル論ナリ、聽クニ足ラサルナリ。

註一、第三十六議會衆議院議事速記第七號、一〇四—五頁

註二、同上、一〇三頁

註三、第三十六議會、貴族院議事速記第十號一三九頁以下

註四、同上、一四四頁、高橋男ハ外債償還ハ従前ノ通り千萬圓宛トシ、大正七年ヨリハ毎年五千萬圓宛トスベシト論ス

註五、同上、五二頁

註六、同上、五六頁目賀田種太郎男質問

註七、同上、第十號一四七頁

三

減債基金法ノ改正ハ、此ノ如ク理義頗ル明白ナリ、然ルニ減債基金ヨリ貳千萬圓ヲ割イテ鐵道資金ニ充ツルト云フニ至テハ、又大ニ議論ヲ生ス、是ニ於テ鐵道會計法ノ方面ヨリモ研究ヲ爲サ

サルベカラス。

從來ノ鐵道會計法ニ據レハ

帝國鐵道ノ建設及改良ニ要スル經費ハ鐵道益金ヲ以テ之ニ充ツ、但シ鐵道益金不足ノ場合ニ於テ政府ハ本會計ノ負擔ニ於テ公債ヲ發行シ又ハ他ノ特別會計其他ヨリ借入金ヲ爲スコトヲ得(第二條)

トアリテ、鐵道資金ハ鐵道ノ益金ニテ辨シ得ル外ハ、公債募集又ハ借入金ニ仰クコト、ナレリ、然リ而シテ鐵道ノ益金ハ年年二百萬圓ヲ増シツツアリト雖トモ、今日ノ益金ハ千八百萬圓ニ止マルノミ、然ルニ政府ノ鐵道計畫ニ據レハ幹線ノ連絡ニナルベキモノノ中最モ急ナルモノヲ漸次ニ建設シテ聯絡ヲ全フスルガ爲メ年年四五千萬圓ノ金額ヲ要ス、此計畫ヲ遂行セントセハ多額ノ公債ヲ募ラサルベカラス、然レトモ現在并ニ將來ノ内外市場ヲ見ルニ、到底多額ノ公債ヲ募ルベクモアラス乃チ年年減債基金貳千萬圓ヲ割キテ之ヲ鐵道益金ニ加ヘ以テ鐵道資金參四千萬圓ヲ得ントス此クシテ七年ノ後ニハ五千萬圓ニ達スルカ故ニ爾後ハ流用額ヲ貳百萬圓ツツ減シ行キ十七年ノ後ニ至テ止ム、其後ニハ鐵道益金ノミニテ五千萬圓ヲ得レハナリ(註、一)

政府ハ此ノ如キ鐵道計畫ニ從ヒ年年ノ鐵道資金ヲ公債ニ依ラス公債償還ニ充ツヘキ金ニ依ラントス、然リ而シテ減債基金ハ年年一般會計ヨリ繰り入ルルモノナレハ鐵道資金ニ充ツヘキ額ダケ繰り入レヲ見合ハシ、直ニ之ヲ鐵道會計ニ貸付クルコトトシ、帝國鐵道會計法第二條中「又ハ」ノ下ニ「一般會計」ヲ加フト云フ改正行ハルルニ至レリ。

是ニ由テ之ヲ觀レハ減債基金貳千萬圓ヲ割キテ鐵道資金ニ充ツト云フト雖トモ、形式上ヨリイヘバ一般會計ヨリ貳千萬圓ダケ鐵道會計ニ貸付クルコトトナルナリ、然リ而シテ一般會計ノ收入

ニハ手數料、私經濟的收入其他雜收入モ存スレトモ租稅ヲ以テ主トスルモノナルコト喋々ヲ要セス。

鐵道會計法ノ改正ニ關シテモ之ヲ難スルモノ多シ、今之ヲ分テ二トス減債基金ヨリ割ケルモノヲ以テ鐵道資金ニ充テズ廢減稅ニ充ツベシトスルモノ、鐵道資金ハ鐵道ノ收益ニ之ヲ求ムベシトスルモノ、鐵道資金ハ預金部又ハ金融市場ニ之ヲ求メ減債資金ニ流用スベカラズトスルモノ是也假ニ第一說ヲ廢減稅說、第二說ヲ獨立自營說、第三說ヲ起債說ト名ケン

余ヲ以テ之ヲ觀ルニ二三說共ニ誤レリ、余ハ進テ此等ノ三說ヲ批評セントス。

今廢減稅說ニ就テ之ヲ見ルニ其思想ノ根柢ニハ目的稅說存ス目的稅說トハ他ナシ減債基金ノ財源ハ非常特別稅ニ在リ、非常特別稅ハ戰時稅ナリ之ヲ永久稅トシタルハ戰時公債ヲ償還センカ爲ニ外ナラズ、故ニ戰時公債ノ償還ニ使用セサラントセハ宜シク之ヲ非常特別稅ノ廢減ニ充テサルベカラズト云フナリ(註二)。

然レトモ目的稅說ハソレ自身誤謬ナリ、近世ノ文明國ニ於テハ殆ト目的稅ナルモノヲ存セズ、若シ偶偶之ヲ存スルモノアルモ、ソハ決シテ稅制上重要ナルモノニアラズ、例ヘハ壯丁稅ヲ以テ廢兵ノ補助費ニ充ツルカ如シ、近世ノ文明國ハ皆豫算統一主義ヲ採リ、國庫統一主義ヲ採ル、特別ノ租稅ヲ以テ特別ノ經費ニ充ツルコトナシ我國ニ於テモ亦然リトス、我國ニ於テハ多數ノ特別會計ヲ存スト雖トモ、特別ノ租稅ヲ以テ其財源トセズ多クハ一般會計ヨリ繰リ入ルルモノニ過キサレハ目的稅ノ理論ヲ以テ之ヲ律スルコト能ハズ、之ヲ減債基金ニ見ルモ、非常特別稅ヲ以テ其財源トセズ、一般會計ヨリ繰入ルモノナレハ經常收入ヲ以テ財源トセリト云ハサルベカラズ、非常

特別税ヲ永久税トスルニ際シテヤ其當時ノ政治家ハ或ハ之ヲ減債基金ニ繰入レテ戰時公債ノ償還ニ資スベシト云ヒ、以テ民衆ニ訴ヘシモノアリシナラン、然レトモ、ソハ政略ノミ之ヲ以テ、我國現今ノ租税制度ヲ説明スルコト能ハズ、若シ之ヲシモ目的税ナリト云ハン乎、非常特別税收入額ハ減債基金ヘノ繰入額ト同一ナラサルベカラズ又減債基金ヲ動カササル以上ハ非常特別税ヲモ動カスベカラズ、然ルニ事實ハ全ク之ニ反シ、非常特別税ノ收入額ト減債基金ヘノ繰入額トハ一致セズ、減債基金ハ壹億千萬圓ヲ下ルコトヲ得ズト定マレルニ反シテ、非常特別税ハ比年減セラレツツアリ、見ルベシ、目的税説ヲ以テ減債基金ヲ律スルコト能ハサルヲ。

廢減税説ハ、減債基金ノ減額ヲ以テ廢減税ニ充テントスルモノナルガ、其根據トスル目的税説ノ誤レルコト此ノ如シ、然リ而シテ此説ノ非ナルハ尙之ニ止ラズ、蓋シ或ル金額ヲ以テ、公債ノ償還ニ充ツルカ、廢減税ニ充ツルカ、抑抑又新事業費ニ充ツルカハ財政策上重大ナル問題タルヲ失ハズ、然ルニ此説ハ輕々ニ之ヲ論斷シ廢減税ヲ以テ、最モ急ヲ要ストシ、鐵道費ノ如キニハ殆ト一顧盼ヲモ與ヘサルカ如シ、是レ豈一ノ大ナル偏見ニアラスヤ、之ヲ現今世界ノ大勢ニ見ルニ、戰亂ノ窮スル所、殆ト端倪スベカラサルモノアリ、我國ハ其餘波ヲ受ケテ、何時、如何ナル舉ニ出テサルベカラサルヤモ知ルベカラズ、之ニ備ヘントセハ宜シク速ニ鐵道網ヲ完成スベシ、斷シテ、廢減税ニ頭ヲ惱マスベカラサルナリ、若シ此説ニシテ尙鐵道問題ヲ顧ミル餘裕アリトセハ少クトモ、第二説第三説ノ臭味ヲモ帶フルモノト云ハサルベカラス。

鐵道ノ獨立自營説ハ鐵道會計カ獨力ニテ其建設費改良費ヲ得ベシトスルモノナリ、故ニ此説ハ建設費改良費ヲ益金ノ範圍ニ止ムベシト云フニ歸着ス、論者或ハ帝國鐵道ノ經營如何ニヨリテハ

貳千八百萬圓ノ益金ヲ振り出シ得ベシト解クモノアレトモ(註三)政府ノ聲言スル所ニヨレハ、益金ハ壹千八百萬圓ニ過キズ、是ニ於テ問題ハ千八百萬圓ノ建設費改良費ヲ以テ満足スベキカ否カトナルナリ、論者ハ之ヲ以テ満足セン、我國民ハ到底之ヲ以テ満足スルヲ得サルナリ、獨立自營ハ將來ノ理想ニシテ、鐵道會計法モ此主義ヲ宣明スルモ、之ヲ以テ現在ノ問題ヲ解決シ得ズト斷セサルベカラズ。

起債説ハ預金部又ハ金融市場ニ就キ借入金ヲナシ又ハ公債ヲ起シテ、鐵道資金ヲ得ントスルモノナリ、從來ノ政策ヲ踏襲シ敢テ之ヲ改ムルコトヲ欲セサルモノト謂フベシ、此説ハ第三十五議會ニ於テハ井上角五郎氏之ヲ力爭シ、(註三)今次ノ第三十六議會ニ於テハ、小林源藏氏之ヲ主張セリ、(註四)以テ政友會ノ説トスベシ。

然レトモ、金融市場ニ就テ公債ヲ起スコトハ決シテ容易ノコトニアラス、外國ノ金融市場ニハ其國ノ戰時公債溢ルルカ如キヲ以テ、戰時ハ勿論戰後ト雖トモ、我國ノ公債ノ募集ニ應スルモノ殆ト之ヲ豫期スベカラズ、內國ノ金融市場ヲ顧レハ、目下少シク浚漫ノ狀ヲ呈セサルニアラズト雖トモ、ソハ事業ノ大ニ起ラサルカ爲メノミ、然ルニ今ヤ事業界ハ漸ク活躍シ初メントスルノ徵ナキニアラサレハ、公債募集ハ却テ事業界ヲ壓迫スルノ結果トナラサルヲ保スベカラズ、故ニ公債募集ハ之ヲ斷念セサルベカラズ。

預金部ヨリ借り入レントスル説モ亦同様ニ之ヲ難スベシ、小林源藏氏曰ク預金部ニハ參千餘萬圓ノ現金、七千餘萬圓ノ公債アリ、以テ鐵道資金ヲ得ルニ難カラズト然レトモ、預金部ノ現金ハ又郵便貯金返済ノ準備トセサルベカラス、悉ク借り上クベキモノニアラズ、又公債ハ先ツ之ヲ賣

リテ後鐵道會計ノ需ニ應セザルベカラス、公債ヲ買フモノハ、減債基金會計ニシテ之ヲ賣ルモノハ大藏省預金部ナリ、而シテ更ニ公債ヲ起スモノハ鐵道會計ナリ、三者共ニ、國庫ノ支店ノ如キモノ、而モ此ノ如キ取引ヲ爲ササルベカラズトセハ、余輩モ藏相ノ口吻ヲ學ブ、之ヲ迂餘曲折徒ニ豫算ヲ錯雜セシムルモノナリト冷笑セサルヲ得サルナリ、(註、六)

從來ノ遣り方ハ此ノ如カリキ、然リ而シテ政府今ハ之ヲ改メシトス、是レ財政上ノ一進歩ニアラスシテ何ソヤ然ルニ政友會ハ此進歩ヲ忌ミ、誤レル舊策ヲ墨守セントス、余輩ハ果シテ其何ノ心ナルカタ解スルコト能ハサルナリ。

(註一) 第三十六議會貴族院議事速記錄五號、五五頁參照

(註二) 小林丑二郎博士が衆議院豫算委員會ニ於テ若槻藏相ニ質問ヲ爲シタル時、減債基金カ目的稅ヲ以テ收入源トセル旨ヲ説ケルカ如シ、

國民黨ノ議論モ亦目的稅說ヲ基礎トセルカ如シ、減債基金法ノ改正ニ贊成シ、鐵道會計法ノ改正ニ反對ス、貳千萬圓ヲ減稅ニ用フベシト云フナリ、(衆議院議事速記錄七號一〇四一五頁)

政友會ノ高橋是清男ノ議論モ亦目的稅論ヨリ出テタル節アリ、

(註三) 國民黨相原氏ノ説、(衆議院議事速記錄一〇四五頁)

(註四) 第三十五議會、(衆議院議事速記錄第十號、一四九頁)

(註五) 第三十六議會、(衆議院議事速記錄第七號、一〇七一八頁)

(註六) 第三十五議會、(衆議院議事速記錄第十號、一三六一七頁)

四

減債基金ノ一部ヲ割キテ鐵道資金ニ充ツルノ政策ヲ難スル説ノ探ルニ足ラサルコトハ前述フル

カ如シ、然レトモ是等ノ諸説ハ未タ問題ノ要點ニ觸レサルノ恨ナキ能ハズ。問題ノ要點トハ何ソヤ、曰ク他ナシ、經常收入ヲ以テ臨時費ヲ支辨シ得ル乎ニ在リ、更ニ詳言スレハ租稅ヲ以テ私經濟的投資ニ充ツルコトヲ得ル乎ニ在リ、蓋シ鐵道資金ハ臨時費ナリ、之ニ反シテ減債基金ハ一般會計ヨリ繰入ルモノナレハ、其收入ノ性質ヨリ見テ經常收入ト云ハサルベカラズ、サレハ減債基金ノ一部ヲ割テ鐵道資金ニ充ツルノ政策ハ、經常收入ヲ以テ臨時費ヲ支辨スルコトトナルナリ、是レ果シテ正當ナリヤ否ヤ

Carl Dietzelガ(註一)經費支辨方法ノ原則ヲ立テテヨリ以來、人皆、經常費ハ經常收入ヲ以テ支辨スベク、臨時費ハ臨時收入ヲ以テ支辨スベシトナシ、又之ヲ疑ハサルカ如シ、此論ヲ以テスレハ、減債基金ノ一部ヲ割テ鐵道資金ニ充ツルコトハ明ニ不當ナリト斷セサルベカラズ、然レトモCarl Dietzelノ經費支辨法ニ關スル原則ソノモノハ、悉ク眞理ヲ含メルモノトナスヲ得ズ、其經常費ヲ支辨スルニ經常收入ヲ以テセザルベカラズトスルハ可ナリ、臨時費ヲ支辨スルニ常ニ必ス臨時收入ヲ以テセザルベカラズトスルニ至リテハ斷シテ不可ナリト云ハサルベカラズ、蓋シ經常費ハ年年歳歳繰リ返スベキ經費ニシテ、其支出ノ效果ハ後年ニ及バザルモノナリ、然ルニ之ヲ公債ノ如キ臨時收入ニヨリテ支辨セン乎、公債徒ニ累積シ、公債費頻リニ増加シ、財政紊亂シテ復收拾スベカラザルニ至ラン、故ニ經常費ハ少クトモ經常收入ヲ以テ支辨セザルベカラズ、臨時費ハ年年歳歳繰リ返ヘサザル經費ニシテ、其支出ノ效果ハ後年ニ及フモノナリ、故ニ之ヲ公債等ノ臨時收入ニヨリテ支辨スルモ、不可ナシ、何トナレハ年年公債ヲ増スコトトナラサルノミナラズ一旦之ヲ支出スルノ結果ハ延テ、後年ニ至リ收入ヲ齎スコトトナルモノアレハナリ、然レトモ臨

時費ハ常ニ臨時收入ヲ以テ支辨スルヲ要ストスベカラズ、經常收入ヲ以テ支辨スルモ亦之ヲ妨ケズ、是ニ由テ之ヲ觀レハ經常收入ハ經常費ヲ支辨スルヲ以テ最下限 (Untergränze) トシ臨時收入ハ臨時費ヲ支辨スルヲ以テ最上限 (Obergränze) トナサザルベカラズ、之ヲ Wagner 以來、學界ニ認メラレタル經費支辨ノ原則ナリトス、(註二)

此原則ヨリ出テテ、減債基金流用ノ政策ヲ見ルニ、又決シテ之ヲ批難スベカラズ、何トナレハ減債基金ノ一部ヲ割テ鐵道資金ニ充ツルハ、經常收入ヲ以テ臨時費ヲ支辨スルコトニ歸シ、經費支辨ノ原則ノ許ス所ナレハナリ。

然ルニ鐵道經營ナルモノハ現今文明國ニ於テハ、少クトモ收益ヲ得シコトヲ目的トセルモノナルカ故ニ私經濟的性質ヲ帶フルモノト云ハサルベカラズ、鐵道經營ガ私經濟的性質ヲ帶フトセハ、鐵道資金ハ、固定資本ヲ投スルモノト見サルベカラズ、然ルニ今一般會計ヨリ繰入レ主トシテ租稅ヲ以テ之ニ充ツルトキハ、租稅ヲ以テ營利事業ヲ經營スルカ如クニモ聞ユ、現ニ目賀田男爵ノ如キ此論法ヲ以テ政府ニ肉薄セリ、(註三)斯ル論者ニ對シテハ只漠然ト「臨時費ヲ支辨スルニハ臨時收入ニ依ルコトモ得、經常收入ニ依ルコトモ得ル」ト云フ原則ヲ以テ之ヲ說服スルコト能ハス、之ヲ說服セントセハ、租稅ヲ以テ私經濟的投資ニ充テ得ルコトヲ論破セサルベカラズ。

經費支辨方法ノ理論ノ發達ヲ見ルニ、Carl Dietzel ニ初マリテ Wagner ニ大成セルカ如シ、而シテ其議論ノ出發點ハ經常費ト臨時費トヲ區別スルニ在ルガ、其區別ニハ、流動資本ト固定資本トノ別ノ觀念ヲ借り來リ、經常費ヲ以テ流動資本ヲ投スルモノトシ臨時費ヲ以テ固定資本ヲ投スルモノナリトナス、Wagner ニ至リテハ臨時費ヲ更ニ私經濟的投資、(privatwirtschaftliche

Kapitalanlage) 國家經濟的投資 (Staatwirtschaftliche Kapitalanlage) 狹義ノ非常費即チ資本ノ破壞トナシ私經濟的投資ハ公債ヲ以テ支辨シ得ルコトヲ説ケリ、(註四)然リ而シテ鐵道ノ建設費改良費ハ明ニ私經濟的投資ト見ルコトヲ得ベシ、故ニ Wagner 以下ノ學說ニ照ラスモ、公債ヲ以テ之ヲ支辨シ得ルベキナリ、然レトモ又此說ニ據リ、論理ヲ進メハ租稅ヲ以テ之ヲ支辨シ得ルコトヲモ結論シ得ベキカ如シ、請フ余ヲシテ少シク之ヲ説カシメヨ。

Wagner ノ云ヘリシカ如ク、經濟的觀察ヲ加ヘハ、經常費支辨ハ當ニ流動資本ノ使用ト見ルベク、鐵道ノ建設費改良費支辨ハ須ラク固定資本ノ投下ト見ルベシ、故ニ經常費支辨ニ充ツベキ租稅ヲ以テ、鐵道ノ建設費改良費ヲ支辨スルハ、正シク、流動資本ヲ變シテ固定資本トナスモノト見サルベカラズ、然ルニ流動資本ヲ變シテ、固定資本トナスコトハ、社會ノ進歩ナリ、文明ノ進歩ナリ、經濟ノ進歩ナリ、是レ主義トシテ歡迎スベク、決シテ批難スベカラズ、果シテ然ラハ租稅ヲ以テ鐵道ノ建設費改良費ノ如キ私經濟的投資ニ充ツルモ不當ニアラスト論斷セサルベカラズ、此ノ如ク、廣ク社會文明ノ上ヨリ觀、國民經濟ノ上ヨリ觀テモ、租稅ヲ以テ、鐵道費ヲ辨スルノ政策ヲ是認シ得ルガ、更ニ、財政ソノモノヨリ觀ルモ之ヲ是認シ得ベシ、租稅ヲ以テ鐵道ノ建設費ニ充ツレハ其結果、鐵道ハ多ク敷設セラルベシ、鐵道多ク敷設セラルレハ、年ヲ追テ其收益モ亦大トナラン、鐵道ノ收益大トナラハ、ソレノミニテ、鐵道ノ敷設ヲナスコトヲ得ン、是レ大隈内閣ガ理想トスル所ナリ、然ルニ此理想カ遂ケラルル上、尙進フ已マス、終ニ鐵道網完成スル時ハ、其收益ハ、最早之ヲ敷設費ニ用フルコトヲ要セズ、其大部ヲ舉ケテ一般ノ行政費其他ノ經費支辨ニ充當スルコトヲ得ベキナリ、獨逸諸聯邦ニ於テ鐵道ノ收入ガ、其國ノ財政ヲ助クルノ大ナルヲ

見テ以テ其例證トスベシ、事茲ニ至ラハ國費膨脹スルモ國民ハ比較的輕キ租稅ヲ負擔スルニ止マリ、大ニ經濟上ニ發展スルコトヲ得ベケン、是レ偏ニ、固定資本ノ増加シタル賜ト云ハサルベラス。以上論スル所ノ由テ之ヲ觀レハ租稅ヲ以テ鐵道ノ敷設費、改良費ヲ支辨スルハ固定資本ヲ増加スル方法ニシテ國民經濟上并ニ財政上、將來發展ノ基礎ヲ作ルモノト云ハサルベカラス、從テ毫モ之ヲ批難スルコト能ハズ、此ノ如キ固定資本ノ放下ハ、公債ニヨリテ、之ヲ爲スコトヲ得レトモ、公債ハ利子ヲ拂ハサルベカラス、然ルニ、租稅ニヨリテ、之ヲ爲ストキハ利子ヲ拂フノ要ナシ、サレハ租稅支辨法ハ却テ財政上都合好キモノト云ハサルベカラス。

之ヲ要スルニ經常收入殊ニ租稅ヲ以テ鐵道資金ニ充ツルハ不當ニアラズ、從テ減債基金ノ一部ヲ割キテ鐵道資金ニ充ツルノ政策ハ之ヲ是認セサルベカラス、論シテ茲ニ至レハ帝國鐵道會計法第二條ハ宜シク。

帝國鐵道ノ建設及改良ニ要スル經費ハ鐵道益金ヲ以テ之ニ充ツ、但シ鐵道益金不足ノ場合ニハ政府ハ一般會計ヨリ繰入レ又ハ本會計ノ負擔ニ於テ公債ヲ發行シ又ハ他ノ特別會計其他ヨリ借入金ヲ爲スコトヲ得。ト改正セサルベカラサリシナリ、今回ノ改正ハ僅ニ

帝國鐵道ノ建設及改良ニ要スル經費ハ鐵道益金ヲ以テ之ニ充ツ、但シ鐵道益金不足ノ場合ニハ政府ハ本會計ノ負擔ニ於テ公債ヲ發行シ、又ハ一般會計、他ノ特別會計其他ヨリ借入金ヲ爲スコトヲ得

トスルニ止マレリ、故ニ改正法ハ一般會計ヨリ借入ヲ爲スト云フ法理ヲ探レルナリ、是レ鐵道資金ハ起債ニヨリテ辨スベク租稅ニヨリテ辨スベカラストノ思想ニ因ハレタルモノト評セサルベカラズ、既ニ一般會計ヨリ借入ルト云ハハ、返還ト云フコトヲモ聯想スルナリ、利殖スト云フコト

ヲモ聯想スルナリ、現ニ貴族院特別委員會ニ於テ前田利定子ノ如キハ、返還ヲ條件トシテ、改正ニ贊成シタリトモ傳ヘラレ、貴族院本會議ニ於テ、目賀田種太郎男ノ如キ、「一般會計ノ金ヲ或ル營業的ノ事業ニ供シテ之ヲ利殖スルト云フコトハ本員ニ於テハ之ヲ解シ能ハス」ト(註三)且ツ問ヒ、且ツ難シタルヲ見ルナリ、若槻藏相ハ「此度ノ改正案ハ一般會計ノ金ヲ鐵道特別會計ニ貸付ケテ利殖シヤウト云フ意味デハアリマセヌ」ト辯シタルモノノ貸付ケト云フ論理ハ之ヲ執テ動カサルカ如シ曰ク

公債ヲ募集セナイト云フコトトシ、而モ鐵道ノ資金ガ必ス要スルト云フコトデアレハ、是チ一般會計ノ歳入ニ求ムル外ハ仕方ガナイ、而シテ鐵道ハ自分ノ益金デ其建設改良費ニ充テタモノナ價廉セシメルヤウニシテ經營シテ行カウト云フノガ今日ノ鐵道特別會計ノ趣旨デアリマスルカラ、是チ一般會計ノ資金カラ鐵道ニ支出シ切りニセスシテ、矢張り貸付ト云フコトニシテ、一方ニハ鐵道ハ自分ノ收益ヲ以テ建設改良費ヲ元利償却シテ行クト云フ精神ヲ貫カシメ一方ニハ鐵道ノ爲ニ要スル資金ヲ確實ニ調ヘテ行カウト云フ斯ウ云フ趣意ニ於テ今回ノ改正ヲ致シタノデアリマス、一般會計ノ金ヲ地方ノ災害復舊費等ニ貸付ケタ例ハ從前幾ラモアリマスノデ、巴ムヲ得メ場合ニ於テ一般會計ノ歳入ヲ貸付ケルト云フコトガ全ク前例ノ無イコトデアリマセヌカラ、今回ノ計畫ヲ立テタノデアリマス、尙鐵道ニ付テハ、以前ニハ一般會計ノ歳入デ其建設費ヲ辨シタモノモアルノデアリマス」(註、五)

ト、是ニ由テ之ヲ觀レバ、政府ハ一般會計ヨリ鐵道特別會計ニ入ルルハ、貸付ヲ爲スモノニシテ、他日之ヲ返還セントスルモノト云ハサルベカラズ、併シ、幾年ノ後ニ之ヲ返還スルカ、其返還ノ方法如何、又一般會計ニ返還スルトシテ、減債基金ノ繰入額ニハ沒交渉ナルカニ至テハ毫モ聞ク所ナシ、蓋シ其邊ノコトハ政府ノ意思モ未タ確定セズト見ルヲ當レリトセン乎、假リニ幾年後ニ之ヲ返還ストセバ、難問題ハ起リ來ラサルヲ得ズ、若シ返還ノ財源ヲ收益金ニ求メハ、鐵道ノ建設

改良ニ要スル資金ヲ奪フコトトナルベク、返還ノ財源ヲ起債ニ求メハ、臨時收入ヲ以テ經常費ヲ支辨スルコトトナルベク、共ニ大ナル批難ヲ招クベケン、是レ皆政府ガ鐵道資金ハ益金并ニ公債ニヨリテ支辨スベキモノニシテ租稅ニヨリテ支辨スベキモノニアラズトノ思想ニ因ハレタルノ結果タラズンバアラズ、成程、從來鐵道會計法ハ益金并ニ公債ヲ以テ鐵道ノ建設改良ヲナサントスルヲ趣旨トセリ、然レトモ、今之ヲ改正セントスルニ際シテハ、從來ノ趣旨ニ因ハルルノ要ナシ、一般會計ヨリ繰入レ、經常收入ヲ以テモ鐵道ノ建設改良ヲ爲スベシト定ムル、又何ノ不可カコレアランヤ、余輩ハ政府ガ減債基金ノ一部ヲ割キテ鐵道資金ニ流用スルノ新例ヲ開キタルニ贊スルモノナレトモ、之ト同時ニ政府カ百尺竿頭一步ヲ進メサリシラ惜ムモノナリ。

(註一) Carl Dietzel: Das System der Staatsanleihen S. 152. ff.

(註二) Adolph Wagner: Finanzwissenschaft, Bd. I. S. 146. ff.

(註三) 第三十六議會貴族院議事速記録第五號五六頁以下

(註四) A. Wagner: F. W. Edl. S. 138 u. S. 152. ff.

(註五) 第三十六議會貴族院議事速記録第五號五八頁—五九頁